

「神の怒りからの救い」

ローマ5：9

堀田修一 22・12・4

カトリック教会（聖書のみではなく儀式、教会会議至上主義、教皇至上主義に権威を置く。マリヤ像を罪のない特別な聖母として拝む）の支配からの宗教改革により、プロテスタント（間違いに抗議する）教会（聖書のみを権威、土台とする。礼拝でみことばが説教される事が始まった）が生まれた歴史（AD1, 500年前半）を覚えておきたい。宗教改革時代の主要な神学テーマは、真の「救い」だった。ローマ・カトリック教会による免罪符（主の十字架による罪の赦しを信じるのではなく、カトリック教会が売る免罪符を買うことで罪の赦しを得るという大きく間違った教え、墮落）販売が横行する中、十字架と復活の主を信じる信仰義認が改めて救いの教理として回復されたのが宗教改革（教職者だけではなく信徒も聖書を読めるようになった）の時代でした。いつの時代も、聖書の中心の教え、「救いの正しい理解」の原点に立ち返ることは最も大切なことです。本日のみことば「ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです」：9。

I 根本的な課題。

1. 9節で再び信仰義認が与える恵みが記されている。改めて私たちに救いとは何かを教えている。人間にとり、根本的な課題は、「人は神の前にいかにして正しくあるか」ということ。これこそ聖書が私たちに問いかける根本的な課題である。今、日本、世界には環境汚染、地球温暖化、放射能汚染、食糧危機、飢饉、戦争、テロ、疫病、カルト、洗脳等、色々な問題がある。それらの根本の原因は、人が神に背き、罪、悪、自己中心、人間が支配したり人から支配されるといふ歪みが生まれ、真の神から人が離れ、神と正しい関係にないという事である。それ故、私たち人間にとり、最も緊急で重要な課題は、永遠の神に立ち返り、「神の前にどうしたら正しくあることができるか、義と認められ、神に受け入れられるか」である。これこそが根本的な課題。これは永遠の問題。私たちが死んで天国に行っても、地球が滅び再創造され、新天新地ができて、神との関係は永遠に続くのです。
2. 神が介入された宗教改革者マルティン・ルターの人生。近代神学の歴史は、「神はあなたを正しいと認め、受け入れているか」ということこそ人間の最も重大な問題と考えた人々によりスタートした。ルターは、21歳の時、大学を辞め修道院に入った。ある日、彼は激しい雷雨に見舞われた。落雷の恐ろしさのあまり「聖アンナ様、お助け下さい。もし助かったら、私は修道士になります」と叫んだ。それから十数年、彼はどうしたら神の前に正しくあることができるかを追求した。多大な修業を積み重ねたが、真の救いが分からず、罪の自覚の中で苦悩し続けた。日に何度も懺悔し、あるときは6時間も続けて懺悔した。心を探り、記憶の中を探し、罪を順々に探し出していった。しかし、何の平安も救いもなかった。彼が気づいたのは、どれだけ心の罪を数え上げ、懺悔しても、自分の罪は解決されないということだった。なぜなら自分の性質そのものが腐っているということに気づかされた。彼は、人間が自分流の正しい行いでは神の前に正しくあることは全く不可能である事に気づいた。そのような課程を通して、彼

はキリストの救いに目が開かれて行った。私たちは、このような証しを聞くとき、自分はどれほど自分の罪を自覚しているかが問われる。と同時に自分の罪の自覚を深くすればするほど主の十字架の恵みと愛の深さやありがたさが分かり神への感謝と讃美が生まれるという恵みに導かれる！

3. 私たちはどうすれば神の前に「義」と認められるのだろうか。聖書は、それは人間の努力では全くできないと教えて下さる。人間は「救い」に関して完全に無力である。誰も自分の罪を償う事ができない。ルターは修道院時代のことをこう言っている。「わたしは…修道会の規則をじつに厳格に守った。それだから、もしも修道士で、修道士生活（善行）によって天国に到達する者があるとすれば、それは私だったと言うことができる。わたしを知っている修道院のわたしの兄弟たちはみなそれを証明するだろう。もしも私があれば以上続けていたなら、わたしは徹夜や祈りや朗読やその他の聖務で、自分自身を殺してしまっただけに違いない」。そのような絶望的な現実の中でルターは、神の導きの中で福音のメッセージに霊的な目が開かれていった。本日の9節のみことばを読みます。「ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです」。このみことばに、「人はどのようにして神の前に正しいと認められるか」の答えがあります。「義と認められた」の原語は、もともと裁判所で用いる用語だった。裁判の結果、罪を犯していない事が判明し、「無罪宣告を言い渡す」ときのことばである。罪が赦されただけでなく、もう一歩前進して、その人には罪がない、「正しい人」と公に認められるということ。つまり、神は罪人の私たちに対して、「無罪判決」を言い渡し、もはや罪の責任を私たちに問われることがないという驚くべき恵み！主が罪の責任を負われた。

Ⅱ「キリストの血によって」。ここで重要なのは、罪人を「無罪」と宣告することである。正しい人を正しいと認めるなら、それは納得できる。しかし、罪人を義と認めるなどということがどうしてできるのか？正しい裁判は、正しい人を無罪とし、犯罪者を有罪にする。もし罪を犯している人を無罪とするなら、それは不正な裁判が行われたということになる。ここで言われているのは、正にそういうことが行われたということ。神は、罪人である私たちを無罪とし、私たちを赦し、義と認めて下さったのです。正しい神が、どのように、それを行われたのだろうか。神は、絶対に正しいお方であるので、神にとってさえ、罪人を「正しい」とすることはできない。それでは、神の義（完全に正しい）の御性質を破ることになる。しかし、この不可能なことを神はして下さった。

1. どのようにして？神は「キリストの血によって」このことを可能にされた。これこそ神の方法。
「このキリストにあって、私たちはその血による贖い（私たちの罪の代価が支払われる）、背きの罪の赦し（主が十字架で私たちの罪の刑罰をすべて受けられ、神の義を全うされたので赦される）を受けています」エペソ1：7。キリストの死は、私たちの罪の赦しのために血を流す十字架の死でなければならなかった。「律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません」ヘブル9：22。主の十字架は最もむごい刑罰の死だった。主の手足は十字架に釘で打ち付けられ、約6時間かけて「いのち」である血が流され死なれた。その罪なき主の聖なる血は私たちの過去・現在・未来のすべての罪を償った。神である主は、十字架で血を流し私たちの罪を償うために、クリスマスに人となられた。感謝し讃美します！主の十字架の死＝血によって成し遂げられた贖い（罪は罪として正しくさばかれる義なる神の前に、主が罪人の私たちの身代わりに十字架で罪の刑罰を

受け、罪の代価を御自身の血という代価で支払われた)のゆえに、神は主を信じる者を義と認めて下さる。

2. 神がどのようにして罪人の私たちを義(正しい)と認められるかの確認。神は罪人である私たちを、無理矢理に義と認められたのではない。黒を白と強引に宣告するのは不正である。神は罪人の私たちを義と認めるために、必要な義を自ら生み出し、私たちにその義を下さった。神は、主の十字架において実現されたすべての義を、私たちに「転嫁」して下さった。Ⅱコリント5:21を後で読んで下さい。
3. 「この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです」。この9節の結論は、罪人の私たちを主の血の恵みで、義と認めるという最も困難な恵みを神は御子を犠牲にして実現された。それであれば、すでに義と認められている私たちが、将来、神の怒りから救われるのは、なおさら確かな恵みです。

祈り：主の血による信仰義認と主の血の恵みによる神の怒りからの救いを心から感謝します。